

# わが校における「ふるさと教育」の実践 「祭りばやし」の継承活動を通して

昭和55年11月22日  
仙台市立坪沼小学校

## 1 はじめに

当校では、昭和55年度より、地元に古くから伝わる伝統芸能「坪沼祭りばやし」の練習を教育活動に取り入れ、地域に根ざしたふるさと教育の実践を試みている。まだ、1年も経過していないが、地域の行事や音楽発表会などでも発表できるまでになり、今後の活動の進め方についても、その見通しを確立することが出来るようになった。ここに至るまでには、

その準備段階、練習開始の段階など、それぞれの段階において、苦労と困難があり、それを乗り越えて、進むべきレールが敷かれたわけである。

そこで、これまでの実践経過について報告し、今後の進め方や、練習方法等について述べ、諸先輩のご指導を賜りたいと考える。

## 2 実践にあたっての基本的態度

### (1) 県の教育重点施策

県では、本年度より教育内容の充実として、「ふるさと教育の推進」を打ち出した。これは、本県の教育基本方針や時代の要請に対応したものであるが、あくまで「心ゆたかな児童生徒」の育成をめざしていることは、いうまでもない。

ふるさと教育の推進にあたっては、次のように示されている。

- ① 郷土の人々の生活と、歴史や伝統を理解し、郷土を愛し、その発展に寄与する心情と態度の育成を図る。
- ② 郷土の芸術文化を愛好し、その保護、継承、発展に努める心情と態度の育成を図る。
- ③ 郷土の自然を愛し、その保全に努める心情と態度の育成を図る。
- ④ 社会連帯意識を培い、集団の維持向上に努める心情と態度の育成を図る。

### (2) 学校としての基本的態度

新教育課程完全実施の初年度にあたり、本校では、創意に満ちた学校経営という面から、地域の特性と学校の実態を考え、ふるさと教育に積極的に取り組むことに決めた。

郷土をよく知り、郷土を愛し、郷土を大切にする心情を育てながら、「心ゆたかな児童の育成」にせまろうというものである。そして、このことは本校教育目標の「人間的な思いやりと、連帯意識に満ちた児童の育成」という、1つの柱でもある。

本来、ふるさと教育の推進は、学校の全教育活動を通して展開されるもので、本校としても、そのようなとらえ方をしている。ただ、ここで述べようとする「坪沼祭りばやし」練習活動は、学校創意による活動とし、3領域外に位置づけ、4年生以上の児童を対象に実施することにした。

## 3 地域の特性と「坪沼祭りばやし」の概要

本校の学区は、仙台市の南西端にあり、名取市、村田町、川崎町と接する、山あいにひらけた盆地である。学区内には、約140戸の家が点在するが、いずれも農業がその仕事である。この地域は、市街化調整区域に指定されており、団地開発などもなく、農家の新たな新築などなく、山のふもとに点々と並んだ農家は、いずれも旧家である。このように最近では、他に見られない、地域全体を文化財としてもよい農村景観を保存しているところである。したがって地域の人々は、昔からこの土地に住んでいる人だけで、他地域から

の転入者は皆無である。また、そのため、地域には昔からの民俗習慣や信仰風俗もよく保存されている。

毎年、4月15日は、八幡神社の例祭で、地域の人々は、仕事を休んで祭りを祝う。この八幡神社の例祭当日、みこしが各部落を回る時に、これに同行して演奏されるのが、「坪沼祭りばやし」で、横笛と太鼓による打ちばやしである。

曲目は、「御靈遷し」「道祓い」「下り端」「道中囃子」「御靈納め」の5曲からなっている。曲の系統としては、平家の落人が伝えたといわれ、秋保の田植え踊りとよく似ている。

さて、この伝統芸能である「坪沼祭りばやし」の継承は、満81歳の窪田長四郎氏だけが、完全継承者で、ほかに何人かの老齢者がいて、細々と継承している現状である。ここに、この地域にある学校として、継承が危ぶまれるこの伝統芸能を、今の時期に引き継がなければならないという、必然的な要請があるわけである。このことは、ひとり小学校に課せられた責任ではないが、実際問題として、横笛や太鼓の練習は、年輩者よりは、年少者の方が覚えや上達もはやく、窪田氏は、小学1年の時全曲をマスターしたという。小学校時代に覚えたことは、忘れないというのが窪田氏の持論である。時あたかも、「ふるさと教育」がさけばれ、学校としては、この祭りばやしの継承活動を無視して、他に「ふるさと教育」は考えられず、全職員一致した意志により、積極的に取り組むことになった。

## 4 実践の経過

### (1) 計画準備

坪沼祭りばやしの練習を教育活動に取り入れようということがきまった段階で、祭りばやしのものを知っている教員はなく、もちろん演奏できるどころか、誰もが横笛にさわったこともなかった。4月21日、まず、継承者の長老、窪田翁を訪れ、学校の意志を伝え協力を求めた。そして、八幡神社宮司（本校PTA会長）もまじえて協議の結果、窪田翁の意向もあり、地域内に、八幡神社氏子会を基盤に、祭りばやし保存会を結成することを決めた。そして、保存会で、笛や太鼓などの楽器を整え、会の事業として窪田翁を講師として学校に派遣してもらうという方針を決めた。

5月10日、窪田長四郎氏の笛、山田勝男、菅野正一両氏の太鼓による演奏全5曲を校庭において録音した。この録音テープは、毎朝校庭や教室に流し、リズムや曲を自然に覚えさせるようにした。

### (2) 塩化ビニルパイプ製横笛の試作

氏子会を基盤として結成されるはずの、祭りばやし保存会は、なんの音沙汰がなく時が経過した。もちろん学校が音頭を取って進めるべきものでもないので、起案されたときの準備工作だけをした。また、保存会結成と直接関係する楽器類の価格見積りに奔走した。

5月10日、スポンサーとなるべき保存会ができるため、楽器がなく、いろいろ思案した揚げ句、尺八師範、丸森町渡辺次郎氏の助言により、塩化ビニルパイプを材料にして横笛を試作した。これを窪田氏に見てもらったところ、練習用として使用できるということになり、12日（月）の朝会時に、1曲だけ演奏できる児童、高山晃和（八幡神社神官子弟）に、全校児童の前で演奏させた。そして、坪沼祭ばやしの継承の意義について話をし、塩ビ製の笛を全児童に作って与える旨を発表した。

塩化ビニルは、径13mm、4mもの（1本310円）から10本の笛を作るようにした。

作り方の手順については、

- ① 見本の笛から、穴の大きさ、間隔を紙に写して、丈夫な紙で型紙を作る。
- ② 型紙により、パイプに穴の位置を印す。（細マジック使用）



- ③ 穴をあける順序は、手もみのきりで、穴の中心を決め、次に電気ドリルで、5mmの穴をあけ、その穴を8mmのドリルで大きくする。(この順で作業をしないと、穴の中心がずれて、穴の位置がずれたり、初めから8mmの刃を使うと、塩ビが破損する恐れがある。)
  - ④ 歌口も同じ要領で、楕円形にあけ、切り出し小刀で仕上げる。
  - ⑤ 笛の片方は、径12mmの木の丸棒を3cm程度に切り、ネルなどの布を巻き、ボンドをつけて押し込み管をふさぐ。
  - ⑥ パイプの切り口、穴のまわりは、サンドペーパーで仕上げる。
- この方法で、塩ビ笛約70本を製作し、5月24日に1~6年全児童と職員に配布した。

### (3) 第1回練習会の実施と反省

5月26日 窪田長四郎氏(81)を講師に招き、4・5・6年児童25名を対象に、第1回の練習会を開いた。

「祭りばやし」には楽譜がなくズゴド(地言か?)という唄で、「トーヒ トーヒ トーシャレロ」というような言葉の曲を覚えるのが、練習の第1段階である。次に、こうして覚えた地言をもとに、さぐりびきをしながら、指使いを覚えていくというのが、窪田氏の練習方法である。

練習会では、地言を掲示し、第1節の曲の演奏ということで、一斉指導の形で行った。この第1回練習では、成果が得られず、反省として、

- ① 練習は、学校側の教師が主体的に指導者となり、窪田氏には、示範をお願いするやり方がよい。
- ② 初期の段階では、音を出すことが難しく、唇の形の作り方、吹き方の基礎練習に十分時間をかけなければならない。
- ③ この段階の一斉練習では、自分の音が聞けないので、個別練習が必要である。
- ④ 学校側教師は、児童同様、笛の音も出せないので、指導法については、独自の創意工夫が必要である。

以上は、5月30日の職員会議での話し合いで、この時点ではこれからの練習の進め方について、自信が持てず、最大の壁に突き当たった感じであった。

実際、塩ビパイプの笛は、音は出しにくい面はあるが、竹笛あっても、最初から音は出ないので、多少音の出にくいところはあるが、塩ビパイプで練習することにした。とは言っても、この時点では、これ以外の方法はなかった。幸い、児童たちは、笛の練習には、割と興味関心を示してくれた。

### (4) 楽譜の作成と、録音テープの活用

前述のカベを打破し、前進をはかるため、学校が主体性を持った指導法の研究に取り組むことになった。それは、次の2つの方法である

- ① 地言により、曲を覚えさせる。

録音テープから、地言の文句を聞き取り、印刷して全員に配布。録音は、高齢者の声なので、それを聞き取りやすく再録音して、時間ある毎に放送で流した。プリントを見ながら録音を聞き、地言を歌えるようにした。

これは、「祭りばやし」全5曲中で1番簡単と思われる、「道中ばやし」(通称トーヒ トーヒ)に限り、まず、この1曲を仕上げることを目標とした。

- ② 楽譜(運指図)の作成

5月31日~6月3日の3日間にわたり、児童に与える「道中ばやし」の楽譜(運指図)の作成に取り組んだ。これは前述の6年高山晃和が、この曲を演奏するので、地言と合わせながら、○●○●○○式の楽譜(運指図)を作成した。

これは、地言と曲の録音テープと合わせながら調整を繰り返す作業であった。

こうして完成した楽譜(運指図)を印刷し、4年以上の全児童に配布した。

### (5) 個別指導の開始

6月中は、音の出し方を重点的に練習させようと試みたが、指導法がしっかりとしていなかったため、大きな進歩をみないまま、時を経過した。この間、フルートの奏法を研究したり、呼吸の仕方、空気の出し方など、指導の方法を考えることに努めた。

7月にはいって、学期末ということもあり、本格的な練習ができないまま、時を過ごしたが、第1学期末までは、低迷期と言ってよい期間であった。こうして夏休みを迎えることになったが、この時点での個別練習の方法を決め、挑戦を試みることにした。

この個別練習の方法は、夏休みに入って、水泳の練習のためにプールに来る児童に、1節ずつ、練習してくる箇所を示して宿題とし、毎朝30分、練習結果を個別にチェックすることにした。朝の時にできない場合は、プールの帰りにチェックすることにした。個人毎の練習成果を記録するためには、縦軸に地言を音節ごとにとり、横軸には、25名の児童名をとり、一覧表を作成した。

このころには、塩ビパイプの笛の音も出るようになり、1節ごとの曲も、1日1日と吹けるようになり、一覧表には、○印の模様が、毎日毎日少しづつ拡がった。

8月10日、PTA関係の有志の方々の好意で、本物の竹笛を全児童分購入することができた。練習に励んでいた児童たちにとって、竹笛の配布は、この上ない贈り物であり、大きな励みとなった。そして、竹笛によって、より美しい音色を目指した練習へと進んだ。

#### (6) 太鼓の練習

8月26日、第2学期が始まり、祭りばやしの練習は、太鼓打ちに入った。5月に収録した録音テープは、太鼓と笛による演奏のため、大太鼓、小太鼓をはっきり聞き分けることができなかつた。そのため、夏休み中の8月9日、窪田長四郎、山田勝男、菅野正一の各氏に来校してもらい、①大太鼓のみ、②小太鼓のみ、③大太鼓と小太鼓を合わせたものを、それぞれ録音した。そして、休み中に前述の楽譜（運指図のほかに、4拍子の小節に区切った楽譜も作った）に、太鼓を書き入れ、笛と太鼓を同時に読めるようにした。

第2学期が始まると、早速この楽譜によって練習を開始した。全児童に細い木の枝で作った小太鼓用のばちを用意させ、ダンボール箱を叩く練習をさせた。これは特別な場合を除いて、一斉指導で行い、その中にグループ練習を組み入れた。

また、大太鼓の練習も同じ方法で行ったが、最終的には、大太鼓1名であることから、数名の児童を選抜して重点的に指導した。練習では、いずれも、ばちさばきの基本練習と、テンポがだんだん速くならないようにすることに留意し、また、笛に練習とも併行して進めるようにした。

#### (7) 仕上げと発表

9月に入って、太鼓と笛を合わせた最終段階の練習に入り、構成を大太鼓1名、小太鼓1名、笛23名ということにした。

この段階で、若干の横笛未完成者がいたが、全員合奏には影響はなくなった。演奏曲は、「祭りばやし」全5曲のうち、「道中ばやし」1曲だけの完成をみたわけである。

第1回の演奏発表会を9月15日の学区民体育祭の際、坪沼地区民全員の前で演奏することにした。そこで、演奏上の演出を考え、「道中ばやし」の間に「道祓い」の独奏を入れた構成をした。すなわち、6年の高山晃和が、この「道中ばやし」の練習期間中に、独自に習得した「道祓い」を、太鼓なしの独奏でいれ、サンドイッチ形式に構成した。

こうして次のような場で、公開演奏をしたのである。

9月15日 坪沼小学区民体育祭 坪沼小校庭

9月30日 仙台市小中学校音楽発表会 市民会館

10月19日 生出地区コミュニティー祭 生出地区公民館

今年度の計画は、以上の結果にみるように、一応の成果を収め、各会場において、たいへんな好評を得ることができた。そして、これまでの練習から、この活動の意義などを含め、10月11日には、宮城テレビ「わが町仙台」で放映、紹介された。

## 5 考察と今後のすすめ方

坪沼地区は、前に述べたように、地域全体が昔の様子をよく留めており、民族習慣のよう保存されているところである。とは言っても、自然環境の保護は兎も角としても、いろいろな慣習や行事が急速に消え、失われつつあることは否めない。

児童は、道ばたに立ち並ぶ古碑を見ても、何らの関心も示さない状態であり、ただ、新しいもの、珍しいもののみに注意を奪われている状態である。

このような中で、この「祭りばやし」の継承活動を取り入れたことは、非常に意義のあることであった。すまわち、この活動を通して児童の姿に次のような変容を見る事ができる。

- ①これまで全く無関心であった伝統芸能に対する関心が、大いに高まってきた。これが、継がれ継がれてきた、ふるさとの曲であるという認識を新たにした。
- ②むずかしい横笛の演奏に挑戦し、苦労を乗り越えて演奏できるようになり、大きな喜びを味わうとともに、横笛に対する親しみを持つようになった。
- ③市小中音楽発表会、生出地区コミュニティ一祭りなどで発表したり、テレビで紹介されたことにより、伝統芸能の継承に対するほこりをもつようになった。
- ④横笛や太鼓の練習を通して、祖父母や父母とのコミュニケーションを深める、共通の話題や問題を家庭内に生み出すことができた。
- ⑤「祭りばやし」の練習をきっかけに、その他の郷土の自然や文化に対する関心度を深めることができた。
- ⑥お互いに坪沼地区の仲間であるという意識を高めると共に、高齢の方々に対する敬老の心が自然に芽生えてきた。

今後の進め方としては、これまでに施設したレールの上を進めるわけであるが、これまでの受け身型の練習でなく、自ら進んで積極的に取り組む姿勢に育てていきたい。すなわち、演奏の方法を習得した上級生が、下級生に指導していくシステムを作りあげたい。そして、縦割り活動を基盤に、自主性と連帶性を合わせて育成したいと考える。

なお、今年度内の計画として、「坪沼祭ばやし」全5曲のうち、「道祓い」の曲を完成させるべく、現在準備中である。

## 6 おわりに

以上、これまでの活動の概略を述べたが、この活動は、今年度に入ってから、計画準備に取りかかったため、スタートの段階で、いろいろと難航した。楽器がないままスタートしたことでもその一つであるし、練習時間もタイムテーブルに位置づけられておらず、朝の時間や放課後の時間を当ててきた。そのため、練習時間が他の行事により、左右されることもあります、不安定なやり方であった。いずれにせよ、これらのいろいろな障害を乗り越えて、初期の目的を一応達成したわけで、今後の進め方には自信が持てることは間違いない。

来年度は、この活動をしっかりと地に着いたものにするために、まず、教育課程の中にしっかりと位置づけ、強力な組織作りをすると共に、地域社会との連帯をさらに深めていきたい。本年度地域に作られた「祭ばやし保存会」も形式だけで、実質的には活動できないでいる状態なので、これに対しても側面から、提携をはかっていきたい。また、これまで、自校のことだけで手がいっぱいであったが、この道の先進校なども視察研究しながら、今後の発展に努めたい。

昭和55年度「ふるさと教育」研究推進同人

[校長] 川村正勝 [教頭] 佐藤達夫  
[教諭] 片桐孝夫 古川行雄 小林保子 菅原和夫  
佐藤弘子 沢口政弘(講師)

協力者

[技師] 石垣今朝男 安海よう子  
[そのほか] 松永静明 安藤初子 大場玲子 嶺和子 佐藤くに子

外部協力者

〔指導〕 雉田長四郎 山田勝雄 菅野正一 小林与志男 遠州昭男

## 「坪沼祭りばやし」継承活動の記録

### 【昭和54年度】

55年度は市小中音楽会に出場できる年である。何を、何学年を出すか?が話題にのぼった。当時の教頭、遠州先生の言「音楽会では同じようなものだけ出演されておもしろみがない。わが校では何かみられるものにしたい。ハッピを着て祭りばやしでもやつたらどうか。」こんな話題が出ただけで、計画の段階にも至らなかった。

### 【昭和55年度】

- ・別冊参考資料 「資料1」の通り…活動概況
- ・8月…横笛26本購入 (PTA有志寄贈)
- ・仙台市教育課題発表会で、わが校における「ふるさと教育」の実践—「坪沼祭りばやし」の継承活動を通して— 発表 「資料4」

### 【昭和56年度】

- ・8月1日…市民音楽会・買い物公園で発表
- ・市教委設立31周年記念式で
  - 1) 市教委表彰 (祭りばやしの継承活動による、ふるさと教育の実践を)
  - 2) アトラクションで演奏披露
- ・「みたまうつし」楽譜完成 「資料2」

### 【昭和57年度】

- ・8月1日 市社会教育課より支給…横笛14本  
同時に割れた横笛の廃棄処分…10本 残30本
- ・10月19日 道徳教育研究発表会のアトラクションで、生出小との合同演奏
- ・1月30日 宮城県青少年ふるさと運動発表会で  
仙台市代表として演奏発表
- ・3月17日 6年生より横笛回収…6本
- ・八幡神社由来・同囃子の解説 「資料3」